



「戦争を取材する―子どもたちは何を体験したのか」

上原中学校 一年一組 伊藤 由偉

日本には八月に大切な日が三つあります。六日の広島原爆記念日、九日の長崎原爆記念日、そして十五日の終戦記念日です。これらの日は、戦争で亡くなった人々に手を合わせる大事な日です。特に終戦記念日は、日本が平和に向かっての第一歩を踏み出した決して忘れてはならない日だと思います。終戦を記念して、テレビのドキュメンタリー番組などで戦争について多く取り上げられました。そして出会ったのが、「戦争を取材する―子どもたちは何を体験したのか」という一冊の本です。僕はこの本のタイトルを見たとき、子どもたちがいったい何を体験したのかとても気になり

「この本を読んで見たい。」
と思いました。

本の中にあつた「世界には三十万人以上の子ども兵がいるといわれています。」という一文に僕は大きな衝撃を受けました。子ども兵という言葉はテレビなどで聞いたことはあつたのですが、まさか三十万人もいるとは思わなかったからです。しかし、どうして子どもたちは兵士になつたのでしょうか。それは子どもたちが政府に反抗するゲリラという武装集団に誘拐され、無理矢理戦わされていたからだったのです。また、子どもたちが逃げて帰ることできないようにもともと住んでいた村や家を焼きはらったり、誘拐した子どもを脅して、自分の家族を銃

で殺させてしまったりもします。こんなにひどい話しはありません。この時、僕は子どもたちが本当にかわいそうだと思いました。また、ゲリラは、子どもだけでなく大人たちにもひどい仕打ちをしていたのです。余計なことをしゃべらせないようにくちびるを削り、ゲリラのやっていることが聞こえないように耳をそぎ、武器を持ってないように手を切り、走つて逃げないように足を切ります。ゲリラは殺すためではなく、見せしめのために拷問をします。そうして、周りの人にゲリラには逆らつてはいけない、逆らつたら自分もこんな風になってしまうんだという恐怖心を植えつけます。そして、人々は村がおそわれて火をつけられても、子どもが誘拐されても、抵抗することができず泣き寝入りするしかないと思わされてしまうのです。僕は、ゲリラに体を傷つけられた被害者の写真を見て胸が痛みました。ゲリラはなぜこのような行為をくり返すのでしょうか。ゲリラにも何か理由があるかもしれないませんが、それを武力ではなく対話で解決することはできなかったのでしょうか。もしゲリラが武装をしなかったら子どもを誘拐して兵士にすることや、何の罪もない大人たちを見せしめとして拷問することもなかったと思います。

日本は過去にいくつもの戦争をし、多くの犠牲者を出してきました。しかし現在は他の国と比べると、平和でとても安全な国になりました。そんな日本に生まれ育った僕にとって、戦争は実感のわからない出来事です。僕は、戦争ジャーナリストとは戦地での銃撃戦などを報道するだけだと思っていました。山本さんは違いました。戦地で暮らす人々や

罪のない子どもたちの命を一瞬にしてうばってしまう残酷さを、報道という形で世界中に発信し続けたのです。僕はこの本を読んで、戦争は他人事ですませて良いことでは絶対に無いと思いました。どんなに平和な国に暮らしていても戦争が永久に起きないという保証はどこにもありません。それに、今もこの地球のどこかで、戦争の恐怖と、となり合わせて生きている人がいるというのは、まぎれもない事実なのです。

山本さんは戦地での激しい戦闘を撮影しながら、同時に、戦争の裏側で人々がどのような暮らしをしているのかも撮影し、伝えてくれた。それによって、世界中の人に戦争について関心を持つてほしい、社会を少しでも変えていきたいという強い思いを持って、発信を続けてくれたのです。彼女は、戦地で恵まれない環境にいる弱者の気持ちを理解し、そばで寄りそうことのできるすばらしいジャーナリストであったと思います。現在も世界各国で、山本さんや紛争で亡くなった多くの人々の平和に対する思いを受け継いだ多くの戦争ジャーナリストや戦場カメラマンが、危険を恐れることなく、世界中に報道するために活動をしています。

今、日本は平和な国です。それは、今までに多くの戦争を経験して同じような悲劇をくり返さないようにどうすれば良いのかを考えてきたからです。僕は今、幸せに暮らせる事に感謝しながら生きていきたいと思えます。